九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中世物語史私注 ： 『木幡の時雨』 『源氏小鏡』をめぐって

辛島, 正雄
徳島大学教養部助教授

https://doi.org/10.15017/10423

出版情報：文獻探究. 20, pp.1-11, 1987-09-26. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

中世物語史私注

――『木幡の時雨』『源氏小鏡』をめぐって――

辛島正雄

しかし、その後の調べにより、これはまた別の角度から説明すべきかとも思うようになったので、ここに前稿の補正を試み、そこからもちあがる問題についても、いささか卑見を述べてみたいと思う。

2

前稿において、筆者は、『木幡の時雨』同様（女三の宮の立ち姿）という表現を美女の形容として用いた作品として、『浄瑠璃十二段草子』を挙げておいた。その後、『鉢かづき』にも、

さてもふしぎのはちかづき、むかしきこへしびじんにわ、やうきひ、りやうしん、そとをりひめ、おのゝこまちがわきり、かうきうでんのほそ殿に、おぼろ月よのないしのかみ、女三のみやのたちすがた、おとにはきゝし、めにはみねば、これにまさじとおぼしめし、御めもはなさずまぼられける。（注2）

のごとくに見えていたことに気づいたのであるが、しかしながら、このような、擬古物語と物語草子とで特異な同一表現が使われている事実も、ここから『木幡の時雨』と『浄瑠璃十二段草子』や『鉢かづき』との間になにがしかのつながりを考えることは困難であり、いわば偶然の一致と見做すよりほかなかった。やや独善的な解釈を許されるなら、『木幡の時雨』のお伽草子的傾斜を示す事例として捉えたかったわけである。

ところが、この表現は、実はすでに早く、『源氏物語』の代表的な梗概書で

1

中世擬古物語『木幡の時雨』に、次のような一節がある。

ゑんの方にたちいでゝ、はしらによりそひてながめいだしたる（中ノ君ノ姿ヲ、式部卿親王ハ）、かの女三みやのたちすがた、かしわぎのうへもんの頭、身をいたづらになしけるも、かくばかりにや、いとことわり、と御らんず。（注1）　（二五ウ～二六オ）

右は、実母に迫害され、石山に幽居させられたヒロイン中の君が、時雨にぬれぬれ石山に参詣していた時、折からおしのびで石山詣でにやってきていた好色の次期春宮候補式部卿親王一行と出会い、ヒロインを見そめた親王が、その美貌を強く印象づけられるくだりである。

ここに『源氏物語』の女三の宮と柏木のことがひきあいに出されていることについては、拙稿「『木幡の時雨』の再検討――中世物語史・序説――」（『文学研究』81輯　昭59・2）において、作品全体を見渡したうえで、（立ち姿）を美的なものととらえ、女三の宮を紫の上と並ぶ『源氏物語』中最高の女性とするがごとき、杜撰かつ不可解な『源氏物語』理解の実態を指摘し、かかる認識の発生径路として、ひとまず、女三の宮・柏木事件が、直接『源氏物語』を繙くまでもなく有名でありすぎたこと、また、源氏絵などによる二次的享受で「若菜上」巻の蹴鞠の場面のイメージ形成ができあがっていたこと、この二点を想定しておいたのであった。

ある『源氏小鏡』中に見えていたのである。『源氏小鏡』の諸本の分類については、伊井春樹氏によって、詳細な調査・報告がなされている（注3）が、その第一系統（古本系統）第一類中、伊井氏が「古形を保ち信頼するに足る善本」（注4）とされる京都大学附属図書館蔵伝持明院基春筆『源氏小鏡』によって示せば、次のごとくである。

さて、かのによ三のみやを、かしはぎのゑもんのぜうの見たてまつりて、おもひかけたることは、かみのまきに、はるのすゑつかた、六でうのゐんにて、かすめるくれのおもしろきに、この御かたのにはにておんまりあり。ゑもんのぜうもまいりたまへる。みやのかはせたまふねこを、いづくよりかしらぬねこをいて、らうがはしてみすのうちへいりてさはげば、みやたちたまへり。ねこのつなにてみすのきて、御すがた見えたまふ。そのおりよりやまいとなる、あさましかりしことなり。つゐに、このみやゆへぞかし、みをいたづらになしゝことは。そのほどのことば　猫のつなひき　はるのゆふぐれ　まり　たつすがた　もやのはしらなどゝいふことあるべし。（注5）　（七五オ～七五ウ）

ここには、「たつすがた」という寄合の詞として見えているだけであるが、同系統の三手文庫蔵『源氏小鏡』では、「御すがた見えたまふ」の後に、

これを女三のみやのたちすがたと云也

という一文が入っており、九州大学文学部国語学国文学研究室蔵『源氏目録』でも、同じ位置に割注のかたちで、

女三の宮のたちすがた是なり

とあるのである。さらに、河野信一記念文化館蔵『光源氏のちうこかゝみ』では、寄合の詞の部分が、

されば、ねこのくびつな、もやのはしらにたち副給ひしを、によ三のみやのたちすがたといふ也。

となっている。そのほかの系統でも、第三系統第一類の『光源氏一部連歌寄合之事』（岡見正雄校『良基連歌論集　三』（古典文庫92冊、昭30）所収）には、

みやのかわせ給ふねこを、いづくよりかしらぬねこおひきたりて、みすのうちへ入りてさはげば、みや立さわぎ給へり。これを女三の宮のたちすがたといふ也。

とあり、同第二類の国文学研究資料館蔵『源氏小鏡』にも、

宮のかはせ給ふからねこを、いづくよりかしらぬねこ来りて、みすのうちへをひ入てさはげば、人々おびへさはぎて立さまよふけはひ衣のをとなひ、みゝかしがましき心ちす。ねこはつないとながくつきたるを、物にひきかけてまつはれたるを、にげんとひこじろふ程に、すだれのつまいとあらはにひきあけられたるを、とみになをす人もなし。此はしらのもとにありつる人々も、心あはたゝしくてものおぢしたるけはひなり。きちやうのきはすこし入たるほどに、うちぎすがたにて立給へる人あり。こうばいのこきうすきにあまたかさなりたるけぢめはなやかに、桜のをりもの・ほそなが也。御ぐしのすそまでふさやかにみゆるは、糸をよりかけたるやうになよびて、すそのふさやかにそがれたる、いとうつくしく、七八寸ぞあまり給へる。かたつき、かみのかゝり給へるそばめ、いひしらずあてにらうたげなり。ねこのいたくなけば、見かへり給へるおもゝち、おいらかにて、うつくしき人やと見えたり。衛門のかみ、むねつぶ〳〵とふたがりておぼゆ。

女三の宮の立すがたとは、是をいふ。

とあるのであって、六条院の蹴鞠の場面における柏木の女三の宮目撃のくだりを理解するための重要なポイントとして、（女三の宮の立ち姿）という言い方のあったことは、疑問の余地がない。もっとも、「女三の宮の立ち姿」なる表現そのものは一部の伝本に見えるのみであるから、『源氏小鏡』一般にまでは敷衍しえないという見方もあろうが、「立ち姿」あるいは「鞠の立ち姿」という寄合の詞としてであれば、多くの伝本にあらわれるのであって、問題はあるまい。

では、このように、〈女三の宮の立ち姿〉という表現が、擬古物語『木幡の時雨』と梗概書『源氏小鏡』とに共通してあらわれるという事実は、いかなることを意味しているのであろうか。それを考えるには、まず、両作の先後関係が気になるところである。

『源氏小鏡』の成立に関していえば、ほぼ問題は煮つめられてきている。従来は漠然と耕雲（花山院長親）作といわれていたわけであるが、近年の諸家の研究により、耕雲よりさらに遡り、南北朝期、二条良基周辺での制作にかかるものと推定されている（注6）。一方、『木幡の時雨』に関しては、玉上琢彌氏が鎌倉末期の成立と判断され（注7）て以来、とくに異論の出たことはないようである。そうすると、現時点での一般的な理解によるならば、おのずから『木幡の時雨』の先行を考えることになる。

『木幡の時雨』が先行するとすれば、〈女三の宮の立ち姿〉なる特殊な表現の一致は、偶然同一表現をとるに至ったか、すでにポピュラーであった表現を両者がともに用いたか、のいずれかであろう。さして流布したとも思えない矮小物語『木幡の時雨』に、『源氏小鏡』に及ぼすほどの影響力があったとは、とうてい考えられないことである。しかしながら、偶然の一致と見ることも、すでによく用いられていた表現だったと考えることも、いずれも問題があるように思われる。それは、『源氏小鏡』諸本の多くに見える〈立ち姿〉ということばの特異な性格による。

『源氏物語』の梗概書として知られる『源氏小鏡』が、内実としては、連歌作法書・寄合集としての性格を濃厚に宿していることも、すでによく知られるところである。〈立ち姿〉とは、そのような『源氏小鏡』に示された源氏寄合なのであった。

源氏寄合の成立・展開の具体相については、寺本直彦氏の論考に詳しい（注8）。そこでは、発生期において「物語の和歌に基づき本歌取と密接な関係をも」（注9）っていたものが、やがて和歌を離れた地の文にまで及んで行く変遷のもようが、跡づけられている。こうした指摘に鑑みれば、〈立ち姿〉という寄合は、『源氏物語』の地の文にあらわれた表現そのものでもなければ（原文は「うちきすがたにてたち給へる人あり」（注10）（六五三頁））、まして和歌のことばでもなく、いわば源氏寄合として作られたことばなのであって、この種の寄合は『源氏小鏡』中には多数見られるものの、鎌倉末期の成立とされる『連證集』の寄合が、和歌を典拠とするきわめてプリミティヴなものばかりであったこと（注11）を思えば、『源氏小鏡』の成立時期からあまり遡らせて、すでに寄合として存在していたとすることは、かなり躊躇されるのである。したがって、このような性格のことばである〈立ち姿〉が、先行する物語においてさも周知のように言及されていたというのは、何としても異様なことであり、また、ポピュラーであったにしては、そのほかの連歌寄合集『光源氏一部連歌寄合』や『連珠合璧集』に〈立ち姿〉の語がまるで見えないのも、不審である。管見のかぎり、〈立ち姿〉という源氏寄合は、『源氏小鏡』独自のものとの感が、強いのである。

もっとも、〈女三の宮の立ち姿〉という切り出しかたが『源氏小鏡』オリジナルでないことも、前掲の数種の伝本の例での表現のしかたから、明らかであろう。ここには、世にいう〈女三の宮の立ち姿〉とはいかなるものであるかを、簡明に説いた趣があるのである。源氏寄合〈立ち姿〉は、そうした共通知識を背景に成立したものではあるだろう。ただ、ここで注意しなければならないのは、その共通知識なるものが、『源氏物語』原典の味読とは別次元のものであるらしいことである。そこでは、『源氏物語』原典を読む読まぬの段階以前に、《源氏物語》の世界には〈女三の宮の立ち姿〉がつきものだったわけである。そうしたレヴェルの認識によって『木幡の時雨』が書かれたとすれば、『源氏小鏡』に先立って成立したとも考えられる。前稿に述べたごとく、『木幡の時雨』における〈源氏取り〉の実態は、まことに貧寒たるものである。しかし、いやしくも王朝物語の系譜に連なろうとする作品ではあり、「かの女三みやの

たちすがた」と自信満々に記す筆づかいからは、たんなる聞きかじりの知識ではない、拠り所の存在を考えたいところである。

また、（立ち姿）を美的なものと捉える『木幡の時雨』の奇怪な読み取りかたも、『源氏小鏡』にあっては、同じ語が当該場面を髣髴させる喚起力こそあれ、美的なものか否かについては関知していないのであって、『源氏小鏡』でのような提示のされかたから『木幡の時雨』のような理解が導かれることはあっても、その逆は考えにくいであろう。

こうして見てくると、通説によって仮定した、『木幡の時雨』先行という成立順序は、根本的に見直してみる必要がありそうである。それならば、『源氏小鏡』先行、それに後れて『木幡の時雨』が成ったという、正反対の想定に立って同じ問題を考えてみれば、どうなるか。

『源氏小鏡』は、連歌隆盛の時代の中で、ベスト・セラーズ的な広汎な享受のあったことが知られ、『木幡の時雨』の作者が見ていたとしても、不思議はない。すると、両作に（女三の宮の立ち姿）という特異な表現の一致があるのも、『木幡の時雨』が『源氏小鏡』から得たのであれば、奇とするに及ばない。さらに、『木幡の時雨』に「かしわぎのうへもんの頭、身をいたづらになしけるも」とある傍線部の措辞は、『源氏小鏡』に「つるに、このみやゆへぞかし、みをいたづらになしゝことは」とあるものを、そのまま流用したのではないかとも思われてくる。いずれにせよ、『木幡の時雨』の当該部分執筆にあたっては、『源氏物語』原典に即くまでもなく、『源氏小鏡』での記述を知っていさえいれば、十分であったと思われる。

このように、『源氏小鏡』の先行を仮定すれば、両作の関係は、いたって明快に説明されることになるのである。

かくて、右の推定が認められるとすれば、ここで筆者は、従来鎌倉末期と見られていた『木幡の時雨』の成立時期を、『源氏小鏡』の影響作ゆえに、南北朝以降に引き下げることを提唱しなければならない。これは、前稿での感触とも一致する。しかし、成立時期の問題はしばらく措き、まずは、『源氏小鏡』との関係を認めることで、『木幡の時雨』の作品としての印象がいかほど変ってくるものか、見ておきたいと思う。

3

『木幡の時雨』には、前掲部分のほかに、もう一例、女三の宮への言及箇所がある。

（中ノ君ハ）ねび行まゝに、光さしそふ心ちして、うつくしなどもおろかなり。（中略）御まへの人々も、あま君をはじめ奉り、光げんじの女三みや・むらさきのうへなども、かくやおはしましけん、とぞ、をしはからるゝに、云々　（二三ウ～二四オ）

前稿では、この条について、「紫の上ど女三の宮とを美女の譬えに併置せしめる無神経さ」を指弾し、「第二部の世界を知らぬ手合いのしわざ」と決めつけてしまったのであるが、『源氏小鏡』によって第二部を理解しているとすれば、必ずしも「無神経」といって責めるだけではすまないようである。というのも、『源氏小鏡』の世界では、女三の宮は、たしかに悲劇のヒロインであるといってさしつかえないと思われるからである。

『源氏小鏡』によって、「若菜」から「柏木」巻まで、いわゆる女三の宮・柏木事件の顛末を読む時、今日の『源氏物語』研究で問題となることの多い、事件の誘因となった女三の宮の人間的欠陥のこと、あるいは宮の降嫁に伴う紫の上の苦悩、そういった要素がことごとく抜け落ちていることに気づかせられる。その一方で、朱雀院の寵姫であり、「いんのうへ、かぎりなくいとをしみおぼしめして、いんの御なやみのおり、もちあつかひ、心ぐるしくおぼして、六でうゐんへこのみやをあづけたてまつりたまー（七四オ）うたことは明記し、事件の展開については、「若菜下一巻に一括してまとめ、蹴鞠の折見そめたこと（前掲）をまずクローズ・アップ、ついで、小侍従の手引によって逢ったこ

と記し（ここに「そのころ、むらさきのうへなやみ給ひて、いと大じにおはしければ、いんもひたすらうちたへて、この御かたにおはしませば、よきひまつくりてあはせそめしなり」（七六オ）とあるだけであるのは、紫の上の「なやみ」の本質にはまるで注意を向けない『源氏小鏡』のゆきかたが、よくあらわれていよう）、秘密露顕のクライマックスとなる。この場面には、「みどりのうすやうの文　しとねのしたあらはるゝ」（七八オ）という寄合が示される。このような要約の後、遡って六条院の女楽の概要が記され、名高い女性たちの花の譬えも抜き出される。原作の叙述の順序に従わない、話としてのまとまりを重視した梗概化は、『源氏小鏡』でしばしばとられる方法であるが、ここでも、女三の宮・柏木事件中心の切り取りかたであることが知られる。「柏木」巻では、宮と柏木の最後の贈答歌を引用し、「…とありしをこそ、女三のみやのけぶりくらべとは申けれ」（八一ウ）と特記、さらに、薫の誕生、源氏との疎隔、自身の出家、と宮の運命を追って、柏木の死に至る。そして、五十日の祝いの折の源氏の歌を引き、最後に、子に先立たれた父大臣の哀傷歌を引く。

『源氏小鏡』の問題の部分は、ほぼ右のような内容であり、これだけを見れば、女三の宮の未熟さなどまったく伝わることもなく、また、その降嫁によって紫の上が深く傷つき苦しんだことも表面に出ない。その一方で、宮の美しかったことは適宜印象づけられ、柏木とのあやまちによって、罪の子まで生み、夫からは疎んじられ、はては尼になった、倖うすき女人であった、と、いともたやすく読ませてしまうのである。

いったい、中世における『源氏物語』享受の現実を思う時、〈女三の宮・紫の上〉と並称することが、さまで異端でも何でもないらしいことに気づかせられるのである。もちろん、『紫明抄』という古注釈の書名や「源氏紫明両栄花」という早歌（寸曲）の曲名に見るように、紫の上とあれば明石の上とくるのが、むしろ自然な連想かとも思われるが、実際に様々な文芸の素材となって親しまれたという点からは、『源氏物語』全編を通じて、紫の上・女三の宮・浮舟をもって、人気女性ベスト・スリーとせねばなるまい。したがって、「げんじの…」とある以上、紫の上と女三の宮が並ぶのは、当然でさえあったと思われる。このことは、曲名を出したついでに早歌に例をとれば、乾克己氏が「寸曲における源氏物語享受の諸相」（同氏著『寸曲の研究』（昭47、桜楓社）所収同題論文）ということで整理された中にも顕著にうかがわれ、それを『源氏小鏡』での話のまとめかたと比較してみるならば、両者に共通する点の多いことが知られる。紫の上関係では、第二部でのその苦悩に焦点をあてることが少ない一方、女三の宮関係では、『源氏小鏡』で注意されていたことがらが、逐一といってよいほどに摂り込まれているのである。

○そよや光源氏の様ことに、わりなく聞えし中にも、鞠に興をすゝめしは、
（中略）旧簾の方にやまがひけん、心にかゝりし玉だれの、見すぐしがたきひまかとよ、奥ゆかしき面かげ、終にいかなる便にか、梢はかほる花ならむ（注12）
（『拾葉集』下「蹴鞠興」）

○思ふ心も浅からず、浅緑の薄様の、いとしみ深き玉章の、顕れ初し茵の下
（『寸曲集』巻五「顕物」）

○いでやこの煙ばかりを、此世の思出ならば又、思あたりに立副て、うき身を放れぬしるべならむ
（『寸曲集』巻三「袖余波」）

○女三の宮の煙くらべ、柏木の露ときえし思
（『拾葉集』上「金谷思」）

○つれなき命はながらへて、忍とすれど柏木の、もりてきこえし夕時雨、染残しける岩根の松の、種をば誰か蒔けむ
（『拾葉集』上「忍恋」）

こうして見てくると、『木幡の時雨』に美女の例として女三の宮をもちきたったことじたいは、時代的好尚でもあり、納得できるとしても、そこに〈立ち姿〉が執拗にからんでくるのは、やはりある屈折を経たものと考えざるをえない。前稿にも述べたごとく、主人公中納言がはじめてヒロインを見た時のそれも〈立ち姿〉だったのであって、この短い物語の中で、ヒロインは、二人の男に〈立ち姿〉を見られ、二度にわたって女三の宮になぞらえられたということ

である。ここには、『源氏小鏡』での段階から、もう一段すすんだ、〈源氏物語〉世界のイメージの変化を、認めるべきであろう。つまり、女三の宮が美女の典型として公認されたことによって、そこに付随する〈立ち姿〉までが、何やら風情ある形姿として一般化されてしまったというわけである。

なお、『弁内侍日記』寛元四年（一二四六）十一月二十二日の条に、

中にだいそうの御屏風をたてたれども、ひきくて、御所へ参る人々も、あなたの公卿どもに目を見合するもまばゆくて、むかし女房のやうにゐざりありきしもをかし。（注13）

とあるのであるが、玉井幸助氏の注に、

上達部の詰めている櫛形のある部屋と常の御所との中隔てに大宋の屏風がたててあるけれど、屏風が低いので、御所へ参る女房たちも、あちらの部屋の公卿たちに顔を見られるのが恥かしくて、昔の女房のようにいざり歩いたのもおかしい。平安時代の女房たちは主上の御前に出るときいざり歩いたのは常であるが、時代が変り、鎌倉時代のこの頃では、その風習が既に古風でおかしく感じられていたのである。（注14）

と説明があり、女性の挙措の習慣がこのように変りつつあったとすれば、誤解が新たな常識として受け入れられる素地は、時代社会の中にもあったことになる。

4

『木幡の時雨』に、『源氏物語』原典ではない、梗概書『源氏小鏡』が直接にかかわっているとすれば、そのほかにもその証跡が認められるかもしれない。『木幡の時雨』には、前掲二例のほか、もう二例、『源氏物語』作中人物への言及が見られるのであるが、そちらの方もひととおり見ておきたい。

まず、中の君にこれまでずっと親身に仕えてくれた乳母子の少将が、結婚のため、去って行かねばならなくなった時の一節。

いとたとしへなく、なきみわらひみ、同心なりつる人にたちはなるゝも、いとかなし。かのすへつむ花の、じゞうにわかれ給ひし御心もをしはかられて、いとあわれなり。（三五ウ）

ここでの対比は、いささかオーヴァーである。末摘花にとっては、侍従が九州まで下ってもう二度と会えぬかもしれない別れであるのに対して、『木幡の時雨』では、一緒に住んでいた少将は夫のもとに迎えられるというだけで、その後もしばしば中の君のもとを訪れているのである。

ところで、「蓬生」巻の一般的な享受のありかたを見てみると、例の、国宝『源氏物語絵巻』にもある、源氏が惟光に導かれて葎の門を分け入る箇所に集中しており、侍従との別れが特別の関心をもたれるということは、なかったように思われる。しかし、『源氏小鏡』では、源氏が訪れるくだりを記した後に、補足のようにして、次のようにある。

又、よもぎふ・すゑつむなどに　かづらといふ事あり。心へべし。このすゑつむの女ばうめのとごのじゞうとて、すゑつむにはまさりて、源氏などの御文の御返事をもし、ちと人がましきがありしを、すへつむのしたしかりし人、つくしの大にゝなりてくだりしおり、こいたてまつりて、つれてくだる。じゞうも、たとへしなき御ありさまなれば、さそふみづあらばとおもひしほどに、ひめぎみをばうちすてたてまつりくだるに、御ぐしのおちにてかづらをしてもちたまへるが、いとうつくしく、九しやくばかりなんありけるを、かたみに見よとて、こじゞうにたびしなり。この事と心へべし。（四五ウ～四六オ）

「かづら」という寄合の説明であるわけだが、『木幡の時雨』の内容を執筆するためであれば、この程度の知識で、必要十分であったといってさしつかえあるまい。

いま一例は、中の君を迎えた中納言が、妻三の君（中の君の妹）に語ることばのなかに見える。

の給ふやうに、中君の御ことも、忘るゝ世なき身ながらも、君をみたてまつれば、ゆかりの草とのみぞおもほゆるや。光げんじは、むらさきのゆかりになぐさみ給いしぞかし。君はことに二ばにおわすれば、いとこそあわれとみたてまつれ。

（四四オ）

光源氏が、藤壷の形代として紫の上を見いだし、生涯の伴侶としたことは、『源氏物語』前編の骨格をなす部分であり、まず第一に知っておかれるべきことであろうから、こうした言及があったとて、不思議はない。ただ、「なぐさみ給いしぞかし」と言い切ってしまうのは、原作の陰翳を知る者にとっては抵抗があろうが、会話中の説得の方便としてもちだされたものであることを思えば、この程度の単純化に目くじらを立てるまでもあるまい。もっとも、ここでもやはり、『源氏小鏡』を見ていれば、いかにも容易に表現できるものであった、とはいえそうである。「若紫」巻の最初に、次のようにある。

このまき、わかむらさきといふ事、むらさきのうへのおさなかりしをよみ給ひし、

てにつみていつしかも見んむらさきのねにかよひけるのべのわか草

とよみ給ひしゆへなり。わかむらさきとは、わかはおさなき文字なればなるべし。これは、源氏、まゝはゝのふぢつぼのみやを、おさなくより心にかけきこえて、いかにしてかと、やるかたなく、人のかずを御らんずるも、もしこの心やなぐさむと、おもひしゆへなり。なずらゑだにあらぬよの中もうらめしくおぼすに、このむらさきのうへは、このふぢつぼに御めいにておはしませば、こうなくにさせたまへるゆへ、ものゝゆかりをば、むらさきの草のゆかりなどいふ事なれば、よそへてよみ給ひしゆへ、このまき、わかむらさきとかけり。ことさらこのまきおもしろくつくりたりとて、しきぶのきみをば、むらさきしきぶとはつけさせたまゑりしが、さても、このきみを御らんじそめて、ながき世のともとなり、この人ゆへ、雲がくれ給ひし事は、云々

（一七オ～一七ウ）

「ゆかりの草」「むらさきのゆかり」には「むらさきの草のゆかり」の詞句が対応し、「君はことに二ばにおはすれば」は「このむらさきのうへは、このふぢつぼに御めいにておはしませば」との対比で、（あなたは、藤壷と紫の上が叔母＝姪の関係で似ていた以上に、中の君とは二葉の関係（瓜ふたつの姉妹というようなことか）でいらっしゃるから）といったものかとも、想像される。いずれにせよ、紫の上登場の巻の初めに、このように便利な要約がなされているわけで、いかな梗概書でも、ある程度読み進める努力は必要だ、というようなことさえなく、手を伸ばせばそこに、必要なだけの情報が用意されていたわけである。

もちろん、『木幡の時雨』における『源氏物語』の影響が、ことごとく『源氏小鏡』による二次的享受であるとはいえないのであるが、平安後期から鎌倉期の物語の中に巧妙・華麗に駆使されていた（物語取り）の技法も、ここにきて、大きな限界に突き当ってしまっていることは、認めざるをえまい。しかし、思えば、現実の問題として、『源氏物語』等の王朝物語が、よほどの努力を覚悟しなければとうてい読みこなしえないものとなってしまっている以上、物語ひとりがその遺産をやすやすと継承しえた道理もなく、早晩『木幡の時雨』のような無残な姿をさらす運命ではあったのである。

5

さて、右に見てきたような『源氏小鏡』の利用法は、あくまで梗概書として、『源氏物語』原作を手短かに知る便宜のためであったが、前述のごとく、『源氏小鏡』が連歌の手引書でもあったことを思えば、その『源氏小鏡』を見て源氏寄合の知識もあったであろう作者が、執筆に際して、連歌的発想や表現をとることも、あるいは考えられるかもしれない。ただ、筆者は、連歌についてきわめてくらく、確かな判断のなしえないのを遺憾とするが、次のような例は、いささか気になるのである。

とおちの里の衣うつつちのおとも、あしたの露にことならぬ身を、いつまでとかいそぐらんと、いとはかなくきゝふし給ふよな〳〵は、云々

（一オ）

『木幡の時雨』の冒頭である。起筆ならびに「あしたの露に……」の部分に、典拠ないし和歌的類型の存することは、前稿においてすでに指摘しておいたが、行論上、再掲しておく。

(A)衣うつとほちの里の槌の音に寝覚の人や袖ぬらすらん　（『拾玉集』）

(a)寝覚して聞けばものこそかなしけれとほちの里に衣うつ声（『長方集』）

(B)とりのこゑなどはきこえで、たゞおきなびたるこゑにぬかづくぞきこゆる。たちゐのけはひたへがたげにおこなふもいとあはれに、あしたのつゆにことならぬよに、なにごとむさぼる身のいのりにかあらんときゝ給ふ。

（『源氏物語』「夕顔」巻）

このように列記したところで、『木幡の時雨』の冒頭表現に(A)(a)と(B)とが続けざまに用いられていることに、何か格別の意味があるようにも見受けられないのであるが、連歌の寄合の知識が背後にあるとすれば、たんに思いつきで並べたわけではなく、かなり意図的・作為的な表現であったかとも思われてくる。試みに、一条兼良によって編まれた「寄合の一大集成書」（注15）たる『連珠合璧集』を繙いてみると、次のような項目が注意される。

①衣打トアラバ、

夜寒秋事　…　をきあかす　…　十市里　…　夕顔の里（注16）

（下・三十・衣類）

②きぬたトアラバ、搗衣同事也。

…　つちの音　白妙の衣　…　隣　夕顔のやど

（同右）

③隣トアラバ、人の家の玉までをば隣と云也。

…　夕がほの宿源　ぬかづく同　きぬたの音同　…

（上・十三・居所）

『木幡の時雨』の起筆に引かれる、秋夜遠くに搗衣を聞くイメージは、北方に出征した夫の帰りを待つ妻の心情を主題とした漢詩の世界が和歌に移植されたものであろうが、連歌にもその命脈は保たれており、①に「衣打」→「夜寒・をきあかす・十市里」とあるのは、その間の消息を物語る。一例を上げれば、『新撰菟玖波集』巻五・秋連歌下に収められた三条西実隆の作に、

山ざとさむくころもうつ声

白妙の霜夜の月に秋ふけて（注17）

とあるのも、そうした伝統にのっとっている。ところが、その一方で、搗衣の寄合には、①にずばり「夕顔の宿」とあるごとく、『源氏物語』「夕顔」巻の、八月十五夜、五条の夕顔の小家で、暁方に隣家の物音を聞く条のことばが、いくつも示されているのである。

いったい、この「夕顔」巻の一節は、寄合としてすこぶる注目されていたところであった。参考までに、その本文からどれほどの寄合が抽き出されることになったかを示せば、次のごとくである（寄合は『光源氏一部連歌寄合』『源氏小鏡』『連珠合璧集』の三書によって知られるもの。傍線を施した一字をもって、略号とした）。

八月十五夜、くまなき月の、ひまおほかるいたやは、のこりなくもりきて、見ならひたまはぬすまゐのさまもめづらしきに、あかつきちかくなりぬるなるべし、となり（光・合）のいへ〳〵めさまして、あやしきしづのをのこゑ〴〵、（中略）くだ〳〵しきとなりのようなさも、いかなる事ともきゝしらぬさまなれば、はぢかゝやかんよりは、なか〳〵つみゆるされたり。ごほ〳〵となる神（光・合）よりもおどろ〳〵しくふみとゞろかすからうすのをと（光「からうす」・合）も、まくらがみとおぼゆ。（中略）しろたへのころもうつ（合「しろたへのころも一ころもうつ」）きぬたのをと（合）も、かすかに、こなたかなたにきゝわかれず、そらとぶかりのこゑなども、とりあつめてしのびがたき事おほかり。…（中略）…あけ

がたもちかくなりにけり。Ⓑ【とりのこゑなどはきこえで、たゞおきなびたるこゑにぬかづく（小・合）ぞきこゆる。たちゐのけはひたへがたげにおこなふもいとあはれに、あしたのつゆにことならぬよに、なにごとむさぼる身のいのりにかあらんときゝ給ふ。】みたけさうじ（小・合）なるべし、なもたうらいだうしとぞをがむなる。「かれきゝ給へ。このよのみとはおもはざりけり」と、あはれがり給て、

うばそく（合）が　おこなふみち（合）をしるべにて　こんよ（合）
もふかきちぎりたえすな（小一首引用）

長生殿のふるきためしはゆゝしくて、はねをかはさんなどはひきかへて、みろく（合）のよをかねたまふ。　（六八～六九頁）

その多さに驚かされるのであるが、伊井氏の調査によれば、『連珠合璧集』の源氏寄合中、「夕顔」巻からの寄合数は、他の諸巻を圧して第一位（注18）なのである。

ともあれ、前掲Ⓑは、このような、連歌の寄合として注意を集めていた場面中の一節なのであった。『木幡の時雨』に引かれた部分は、上記三書には寄合としてあらわれなかったけれど、実作では、『菟玖波集』巻十六・雑連歌五に収められた頓阿の作に、

なにをむさぼるこゝろなるらむ
朝露のあだなる世とはしりながら（注19）

とあるのが、明らかに同じ部分を踏まえている（注20）。

このように見てくると、起筆の、「とおちの里の衣うつつちのおとも」から「あしたの露に……」と展開する筆の運びには、擣衣を媒介として連想が「夕顔」巻を引き寄せ、ヒロインの心情表現にふさわしいものとしてⒷの一文が選び取られた、このように考えられはしまいか。あるいは、「とおちの里」の語をひとまず度外視するならば、「衣うつつちのおとも」は、「夕顔」巻の前掲文中の「しろたへのころもうつきぬたのをとも」という、『連珠合璧集』で三つの寄合を出した一文を直接の出拠とし、「あしたの露に……」は、同じ「夕顔」巻中にあることから自然に導かれたのであり、仕上げに、「夕顔」巻からの引用のままにしておくと隣家の騒音のイメージとなりかねないので、擣衣の寄合として一語「とおちの里」を冠することによって、一転、秋夜の物思いにふさわしい音響効果となした、このような次第かもしれない。いずれにせよ、擣衣をめぐる寄合の系列に、和歌の伝統的な表現・イメージと、『源氏物語』の「夕顔の宿」の場面との、二つの相異なる方向があったために、それを利して企てられた冒頭表現ではなかったか、と思うのである。

6

前稿において筆者の意図したところは、物語『木幡の時雨』を、〈擬古物語からお伽草子へ〉という物語史的展望の中で、過渡的な姿を見せている作品として捉え直そうとするものであった。本稿では、それに加えて、梗概書『源氏小鏡』の関わってくる可能性を検討してみたわけである。

ここで、これまで保留していた『木幡の時雨』の成立時期について私見を述べるとすれば、どうも室町期に入ってからの作ではないか、との感触を拭いがたい。前稿では、「決してこの物語を室町時代物語に格下げしてしまえなどといった暴言を吐いているわけではなく」といったふうに、多少通説に対する遠慮のようなものがなかったわけでもないが、率直にいえば、お伽草子類の成立時期とほとんど重なってくると見て、何ら不都合はないと思われる。そうなれば、これまでお伽草子的（傾斜）などとことばを濁していたことが――『浄瑠璃十二段草子』や『鉢かづき』『あま物語』『岩屋の草子』との関連や近似も、十分に予想しえるということになろう。

このような、室町期成立の王朝風物語などという、常識に外れたことを説くのも、じつは近年、『夢の通ひ路物語』のごとき長編擬古物語が室町期の作たることが明らかにされ（注21）たり、現存『しのびね』の成立を室町まで引き

下げるべきかとする提言（注22）があったりし、筆者自身も、新出の『あきぎり』が室町期の成立と見ざるをえない作品であることを論じた（注23）ことがあって、（擬古物語からお伽草子へ）という単純な見通しでは覆いえない、物語の錯綜した流れが見えてきたからである。『木幡の時雨』もまた、そうした展望の中に組み入れてこそ、さまざまな問題性も浮かび上がってくるものと考える。

また、本稿では、『源氏物語』の影響という問題について、『源氏小鏡』という梗概書を介した二次的享受である可能性を検討してみたわけであるが、こうして見ると、前稿でも述べたごとく、中世の物語作者たちの『源氏物語』等への親昵度には、かなりいかがわしい部分のあったであろうことを、あらかじめ警戒しておく必要がありそうである。ただ、それも、『源氏物語』原典に対する無理解ということで貶め去って、それで片のつく問題ではないのであって、そうした理解のありかたが、やはりまぎれもなく一つの《源氏物語》享受の姿であったことを、忘れてはなるまい。物語どうしの影響関係といえども、さまざまなレヴェルでのそれがありえて、むしろ当然であろう。

なお、物語と連歌との関わりについては、思いつきを述べたにすぎず、まったく自信のかぎりではないのであるが、たとえば、改作本『夜寝覚物語』の序の部分が、連歌の会の座談のかたちをとっていることなどを思えば、あながち無縁というわけでもなさそうなのである。物語と和歌といえば、さまざまな関連性が、かまびすしく論じられているのであるが、連歌が王朝物語に滋養を得ていることはいうまでもないとして、その一方で、連歌（とくに寄合）に凝縮される王朝的表現・イメージのエッセンスが、逆に物語の表現形成に影を落としてくることも、十分考えられそうに思われる。

以上、問題提起に終始し、確かなことを引き出すまでには至らなかったが、大方の御教示を得て、今後の中世物語史研究に資することができれば、幸いである。

（一九八七年四月稿）

（注1）『木幡の時雨』の本文は、大槻修編『甲南女子大本こわたの時雨』（昭56、和泉書院）により、所出丁数・表裏を示した。

（注2）横山重・松本隆信編『室町時代物語大成　第十』（昭57、角川書店）所収写本三四四頁。そのほか、時代は下がるが、仮名草子『薄雪物語』にも、

○みな水晶の珠数をもち、たたずみ給ふ御姿、容顔美麗にて、霞ににほふ春の花、風にみだるる青柳の、絲春風にしたがふ風情、昔を聞きつたへしも、漢の李夫人楊貴妃、小野の小町の若盛り、女三の宮の立姿も、これにはいかでまさるべき。昔をとるにためしなし。（野田寿雄校註『仮名草子集　上（日本古典全書）』（昭35、朝日新聞社）一六四頁）

○さてまた君の御姿、春の花とや秋の月、なをしも物にたとふるに、女三の宮の立ち姿、朧月夜の内侍のかみ、弘徽殿の細どの、楊貴妃李夫人れんせうじやう、せいしの前に十郎御前、しまわう姫、松浦佐用姫、衣通姫、常磐御前、みなつる女、小野の小町や天女の姫、当麻の中将あやめの前、吉祥天女摩耶夫人、まこもの前に千手の前、静御前星の宮、和泉式部小督の局、大磯の虎姉妹、うつろひやすき花の色、紫式部仏御前、豊後の国なるまんの長者のひとり姫、たまよの姫をはじめとし、もろこし天竺わが朝に、美人多しと申せども、いかで君にはまさるべき。（一九八～一九九頁）

のごとくに見えている。なお、このようなお伽草子の表現性の問題については、村上學「御伽草子の御伽草子享受」（「解釈と鑑賞」50巻11号　昭60・10）をも参照されたい。

（注3）伊井春樹著『源氏物語注釈史の研究　室町前期』（昭55、桜楓社）第二部・第一章・第二節「『源氏小鏡』の諸本――その成長の諸相――」参照。

（注4）（注3）伊井論文八八〇頁。

（注5）以下、『源氏小鏡』の引用は、この伝持明院基春筆本により、所出丁数・表裏を示した。

（注6）寺本直彦著『源氏物語受容史論考』（昭45、風間書房）後編・第七節「源氏小鏡作者説の吟味（上）――主として耕雲撰説について――」、第八説「源氏小鏡作者説の吟味（下）――（一条の大閤の御弟南禅寺の長老）説その他――」ならびに（注3）伊井著書第二部・第一章・第一節「『源氏小鏡』の成立」参照。

（注7）玉上琢彌「こはたの時雨論攷」（『国語・国文』7巻10号　昭12・10）。新し

いところでは、大槻修「物語『こわたの時雨』ところどころ」（「甲南女子大学研究紀要」20号　昭59・3）も、この線で考えているようである。

（注8）　（注6）寺本著書前編・第二章・第五節「源氏寄合――その成立と性格――」参照。

（注9）　（注8）寺本論文四八五頁。

（注10）　『源氏物語』の引用は、秋山虔・池田利夫編『尾州家河内本源氏物語』（五冊。昭52～53、武蔵野書院）により、所出ページを通算ページで示した。

（注11）　金子金治郎・山内洋一郎編『鎌倉末期連歌学書（中世文芸叢書4）』（昭40、広島中世文芸研究会）解説参照。

（注12）　早歌の引用は、吉田東伍編『宴曲全集』（大6、早稲田大学出版部）によった。

（注13）　玉井幸助著『辨内侍日記新注　増訂版』（昭41、大修館書店）三四頁。

（注14）　（注13）玉井著書三七頁注（二六）。

（注15）　木藤才蔵・重松裕巳校注『連歌論集　一（中世の文学）』（昭47、三弥井書店）解説八頁。

（注16）　『連珠合璧集』の引用は、（注15）木藤・重松校注書所収本によった。

（注17）　横山重・金子金治郎編『新撰菟玖波集　実隆本』（昭45、角川書店）一〇五六～一〇五七番。

（注18）　（注3）伊井著書第二部・第一章・第六節「『連珠合璧集』の源氏寄合」参照。

（注19）　金子金治郎著『菟玖波集の研究』（昭40、風間書房）所収本一五四九番。

（注20）　（注6）寺本著書前編・第二章・第二節「二条良基時代」四一一頁に指摘がある。

（注21）　工藤進思郎「『夢の通ひ路物語』成立考――典拠による考察を中心として――」（「北住敏夫教授退官記念日本文芸論叢』（昭51、笠間書院）所収）、同「『夢の通ひ路物語』の成立追考――伏見殿千首歌（引歌）と『源氏物語』の依拠本文をめぐって――」（「岡山大学法文学部学術紀要」40号　昭54・12）ならびに、塩田公子「『夢の通ひ路物語』成立考」（「名古屋大学国語国文学」56号　昭60・7）参照。

（注22）　三角洋一「改作物語の和歌」（「人文科学科紀要」81輯　昭60・3）参照。

（注23）　拙稿「擬古物語とお伽草子の間――新出『あきぎり』物語をめぐって――」（「文学」掲載予定）参照。

（付記）　本稿は、昭和六十一年度科学研究費補助金（奨励研究(A)）による成果の一部である。なお、論の概要は、昭和六十年三月二十三日の古典談話会（於九州大学文学部）の席上で口頭発表したが、その折の礎稿に今回の調査結果を盛り込んで大幅に修補を施し、完成稿とした。資料調査の便宜を与えていただいた関係諸機関、中でも、伝持明院基春筆『源氏小鏡』の閲覧ならびに紙焼頒布の許可をいただいた京都大学附属図書館に対し、あつく御礼申し上げる次第である。

――徳島大学教養部助教授――